

つなぐ思い — エルトゥールル号 —

大型連休を目前に控えた四月のある日、私は和歌山県の南端の町、串本町を訪れていた。この地を旅行先を選んだ理由は昨年の夏にあった。放浪旅行の大好きな私は、アルバイトで貯めたお金で思い切ってトルコ旅行に出かけた。しかし、旅の初日にリュックサックを置き忘れるという大失策をやってしまった。片言の英語しかしゃべれず、途方に暮れる私が日本人だと知ると、トルコの人たちは本当に親身になって助けてくれた。私がトルコの人たちに、

「どうして、そこまで親切にしてくれるの。」

と聞くと、決まって、

「トルコは、昔、日本に助けられた。日本はいい国。日本人もいい人たち。」

と、笑顔の返事が返ってきた。とにかく彼らの尽力もあって、無事にリュックサックが見つかり、旅を続けることができたが、私は、

（見ず知らずの外国人にどうしてここまで親切にしてくれるのか。日本とトルコの間にはどういう関係があるのだろうか。）

と、疑問に感じた。

また、その後の旅先で出会ったトルコの人たちも日本人の私に対して、とても親切だった。彼らの態度に、百年以上も前のトルコ軍艦エルトゥールル号の遭難事故がかかわっていたことを知ったのは、日本に帰国してからのことだ。エルトゥールル号の遭難事故を調べていくうちに、私は、実際にその地を訪ね



てみたいという強い思いに駆られるようになった。

私が最初の目的地に選んだのは、串本町の西に位置する海中公園だ。ここには、海洋発掘調査によって引き上げられたエルトゥールル号と六百名をこえる乗組員の遺品が特別展示されていた。

(生きて祖国に帰りたいかっただらう……。)

やりきれない思いで海中公園をあとにした。

私が次に行くところは決まっていた。串本町大島^{おおしま}、そこには悲劇の舞台となった檜野埼^{かしのざき}がある。

明治二十三年(一八九〇年)九月十六日、夜のことだ。当時の檜野埼灯台は難所である熊野灘^{くまのなだ}の守りとしての大きな役目があり、特にこのような暴風の夜には、当直の職員の緊張が続いていた。あたりは真っ暗で風の音が灯台の官舎を大きく揺らす。職員は、

(嵐よ、早く過ぎ去ってくれ。明日は、晴れてくれよ。)
と願うばかりであった。

「ドンドンドン。」

午後十時半ごろ、突然入り口のドアが激しく叩^{たた}かれた。すると、びしょ濡れで、服も裂け血まみれとなった異国の男が倒れ込んできた。

(これは大変なことだ。)

言葉は通じずとも恐ろしいことが起こったと直感した。職員は本をもってきて、男に国旗を指さすように促



引き上げられた大鍋

すと、トルコの国旗を指さした。彼は、エルトゥールル号に乗船していたトルコ兵だった。彼の身振り手振りから、まだたくさんの者が救出を求めていることがわかった。

職員は、吹き飛ばされそうな嵐について樫野区長に急を知らせた。また、海難事故に気付いた樫野の人たちも集まり、地区あげての救出が始まった。目もくらむような崖がけをはい上がってきた人、村人に背負われ救出された人等、明くる朝までに六十九名にふくれあがっていた。トルコ兵の多くは服が裂さけ、傷つき疲れ切っていた。

「大変だ、かなり体が弱っているぞ。」

「ありったけの食料と着物をもってこい。」

樫野の人々は、必死だった。

樫野は当時六十戸ほどの小さな集落で、蓄えはほとんどなかったが、貴重な米、収穫を待つばかりになっていた畑の芋いも、さらに家で大事に飼っていた鶏まで救出したトルコ兵のために食事として与えた。同時に、夜通し遭難者の搜索も続けていた。

「食料も人手も足りない。樫野だけでは無理だ。他の村にも助けをもらおう。」

樫野区長は、大急ぎで隣の須江地区すえ長に応援を求め、その足で大島村長のもとへ向かった。

「大変なことだ。急がねば。」

知らせを受けた大島村長は、島中の医師を集め、村役場に保存してあったビスケットや魚の缶詰等の非常用食料を船に積み込み、万一のために用意していた現金を手に、まだ高い波が残る中を樫野へ急行した。

翌日、トルコ兵たちをより大きな蓮生寺れんしょうじに運び、看護と世話を行った。この最初に救われた六十九名の将兵たちは、医師や村人たちの懸命の介護けんめいの甲斐かひあって一人も命を落とすことなく、九月十九日に大島を立った。

生存者が離島した後も、大島の人たちは助からなかった人たちの遺体の捜索、収容、そして葬る作業をか月近く続けた。

九月二十二日、手当を行った医師たちに、明治政府から「薬代及び治療代の精算書を作成せよ。」との命令が伝えられた。医師たちは、

「負傷者の惨状を見かねて治療を行ったのであり、治療費を請求するつもりはございません。薬代及び治療代はすべて義援といたしたく、よろしくお取りはからいくださいますようお願いいたします。」
と、報告した。

私は、この事故で亡くなったトルコ兵をまつる慰霊碑に向かった。この慰霊碑は、昭和十二年（一九三七年）にトルコ政府によって建立されたものだ。遭難直後に各地から集まった義援金で建設された旧墓地の「土国軍艦遭難の碑」等もあった。慰霊碑の入り口に「追悼歌」と書かれた小さな碑があった。私がそれに見入っていると、通りかかった女性が声をかけてきた。

「観光ですか。」

「はい、トルコ旅行をきっかけにエルトゥールル号のことを知ったので……。きれいなところですね。」

「ええ、いいところでしょう。今でも年に一度、小学生たちがこ



こを掃除して、その歌を歌ってくれるんですよ。」

「いつごろからそういう取り組みをしているのですか。」

「掃除は戦前からだと聞いています。追悼歌は、私が小学校四年生の時からだから、昭和三十五年（一九六〇年）からかしら。」

それを聞いて、私はトルコで出会った人たちの言葉や笑顔が鮮やかによみがえってくるのを感じた。この地に生きる人たちの思いが伝わるような気がした。子どもたちが歌うという追悼歌の最後は、こんな言葉で締めくくられていた。

（意味）

檜野なる熊野の浦へは

檜野という熊野の海辺で

老い老いし漁人は

歳老いた漁師たちが

指さして 声をひそめる

海を指さしてひそひそと話をしている

風くろく 暴れの夜なりし

真っ暗な 暴風で荒れた夜だった

ああ われら とわに語らめ

私たちはこの事故を永遠に語り継いでいこう

私は慰霊碑を後にし、トルコ将兵たちが最初に救いを求めた灯台の官舎に向かったのびる遊歩道を、ゆっくりと歩いていった。道の両脇には咲き終えた水仙が無数に広がり、風に揺れていた。灯台を回り込むようにして檜野埼の突端に立った時、私の前にはどこまでも広がる大海原と青い空があった。

※注1 義えん・・・慈善や被災者救済等のために、金銭や品物を差し出すこと。

(参考文献)

・『トルコ軍艦エルトゥールル号の遭難』和歌山県立串本高等学校歴史部・森修

(作成協力・写真提供)

・串本町教育委員会